

「夢の教室」開催
〜夢があるから強くなれる〜



(財)日本サッカー協会（JFA）が実施しているプロジェクト、「夢の教室」が11月15日、佐賀小学校の5年生を対象に行われました。

このプロジェクトは現役のプロサッカー選手をはじめ、野球、バレーボール、水泳などさまざまな種目で活躍する選手やそのOBが「夢先生」として小学校の教壇に立ち、自らの体験をもとに「夢をもつことの大切さ」「夢をかなえるために何をすべきか」「フェアプレー精神の重要性」などを講義と実技を通じ

て子どもたちに伝えます。

この日の「夢先生」は、Jリーグの横浜Fマリノスなどで活躍した、元プロサッカー選手の山田隆裕さん。JFAスタッフの平間智和さんとともに佐賀小学校を訪れ、子どもたちと楽しい時間を過ごしました。

体育館に集合していた子どもたちの前に山田さんらが登場すると、始めはみんな緊張している様子でしたが、平間さんのゆかいなトークやボールを使ったゲームでだんだんと笑顔が見られるように。よい結果を出すためにみんなで考え、アイディアを出し合う時間を設けるなど、元プロ選手ならではの要素も多く含まれていました。



サッカーボールを使っの「だるまさんが転んだゲーム」にみんな大喜び。中央、ゼッケンを首に掛けているのが山田さん。

その後、教室に移動してからの講義では、山田さんが小学生のころの出来事やサッカーとの出会い、プロを目指すことを決めたきっかけなど貴重な話を聞くことができました。

「僕はうまい選手じゃなかった。プロにはなれないと批判も受けた。けれど夢に向かって決してあきらめなかった」。

高校時代には6度の全国優勝を達成。プロ選手としてもスピードあふれるプレーで活躍し日本代表にも選出されるなど、華々しいサッカー人生を送ってきた山田さんからは想像できない、挫折や努力の話に子どもたちだけでなく先生も熱心に聞き入っていました。



人生の浮き沈みを表わした「夢曲線」を黒板に描き熱弁する山田さん。

講義を終えて、配布された「夢シート」に自分の夢やそのために努力していることを記入、みんなで発表しました。

将来の夢は「プロサッカー選手になつて海外で活躍すること」という小橋充幹くんは、「人一倍練習する。いつでも一生懸命やる」と発表。山田さんに「スペインに応援に行くから」と約束してもらい満足そう。また、「介護福祉士になりたい」と発表した浜中音乃さんには、「僕には介護が必要なおばあちゃんがいいます。大切な仕事だと思えます」とエールを送っていました。

最後に「やっていて楽しい、好きと感じる、本当の夢」をもってください。遠くから応援しています」とメッセージを残し、「夢の教室」は終了しました。

夢の教室はいかがでしたか？
夢の教室はこれにて終了。
でもキミの夢は、ここから
が本番です。
キミだけの夢に向かって、
キミだけのやり方で、さあ明日
日から、キックオフ！

(財)日本サッカー協会

漁村の暮らしの貴重な資料に

上川口地区の天満宮に古くから残る絵馬があります。慶応元年の作品で作者は不明。縦約65cm、横約95cmの杉板に岩絵の具でカツオ一本釣りの様子が生き生きと描かれています。

帆掛け舟（カツオ船）には14人の乗組員が乗っており、エサを撒く人は赤いふんどし、カツオを釣り上げる人は紺の法被と、仕事の役割によって服装を変えているのが分かります。漁師の表情やカツオ一匹一匹まで鮮明に残っており、漁の様子を詳しく表現しています。



千葉県にある国立歴史民俗博物館の松田教授は、「保存状態が良く、色がこれほどきれいに残っているのは稀。当時の様子を伝える貴重な資料になります」と、歴史的価値を高く評価。複製品を作成し、博物館内にある漁村の暮らしを紹介した展示室「海辺の民」のコーナーに展示する予定です。



複製品を作成するため、専門の職人が細かくチェック。杉板の傷み具合や絵の具の塗り方など時間をかけて確認しました。

保護のためには特別な処理が必要で、絵馬は町が大切に保管。今後もカツオのまちを後世に伝え続けます。

* 左上の「奉寄進」とは神様に奉りすることの意味。
* 右上に描かれている陸地（色が剥がれている部分）は、下田の河口付近や布の辺りではないかと推測されています。
* 裏には乗組員の名前が書かれていますが、解読できず調査しても分からないだろうとの事です。

映画「月の下まで」撮影終了

黒潮町を舞台に、漁師の父親と障がいがある息子との葛藤を描いた映画「月の下まで」の撮影が11月6日から21日まで、町内の民家や漁港などで行われました。

監督は平成21年3月まで高知新聞の記者として勤務していた奥村盛人さん（32歳）。以前から興味があったという映画監督を目指し、都内の映画美学学校に進学。今作品が初監督であり脚本も執筆しました。



「本番いきます！スタート！」。撮影が始まると一気に現場の空気が変わります。

——カツオ一本釣りの漁師、勝雄は、知的障がいをもつ息子雄介を母に任せきりで漁に精を出していた。母の死を機に雄介と二人だけの生活が始まり、最初はぶつかり合ってしまうもの

の、周囲の人々に支えられながら徐々に息子と向き合っていく——という家族愛をテーマにしたストーリー。

役者さんやスタッフは町内に民泊し、オフの日は地域を観光するなど、住民とのふれあいもありながら撮影は進みました。



水揚げのシーンで演技指導をする奥村さん(左)と主人公勝雄役の俳優、那波隆史さん(右)。

自宅の部屋を撮影に提供した女性は「役者さんが役に入っていく集中力がすごい。勝雄が雄介の首を絞めようとするシーンではあまりの迫力に見ることができなかつた」と、普段体験することができない現場の雰囲気にも興奮気味。

監督だけでなく照明係や音係などもみんな若く、いい作品を撮ろうと一生懸命。「こんな現場を見たら応援したくなる」という期待の映画は、来年4月の公開を予定しています。

素材はとことん黒潮町

黒潮町の素材を使った『一日だけのレストラン』が11月9日、黒潮一番館で開店。町内生産者などを中心に30人が集まり、一人4千円のイタリア料理を楽しみました。

高知市のレストラン「マンジエ・ササ」のオーナーシェフ笹垣朋幸さんが、「地元の食材がどんな料理になっていくのかを見て食べていただき、その価値を再確認してもらうために」と、土佐佐賀産直出荷組合代表の浜町明恵さんや黒潮町雇用促進協議会と協力して開催しました。



メニューは「カツオとトマト

のプロバンス風ガトー仕立て」や「いろいろキノコのフラン」「里芋ときびなごアンチョビのテリーヌ」など計9品のフルコース。カツオはもちろんラッキョウにきのこ、砂糖や塩にいたるまで、オリーブオイル以外はすべて黒潮町産というこだわりぶりです。



高知の食材を生かし高知をもっと元気にしよう、さまざま地域で活動を行っている笹垣シェフ。地元食

材をふんだんに使って料理を作るのがコンセプトの今回の企画に、「野菜だけでなく海の幸も豊富なので、コース料理にしやすいかった」と黒潮町が新鮮な食材に恵まれていることを実証してくれました。

これを機に、レストランへの野菜の仕入れが決まった農家もあり、また、会場で人気のあった「グアバアイスクリーム」のレシピを提供していただくなど、販路開拓や商品開発にもつながりました。

小学生俳句大会 入選作品の紹介

町内の小学生を対象とした俳句大会の表彰式が11月20日、大方あかつき館で行われました。「うたの道づくりの会（小野義廣会長）」の主催。

5回目となる今年は、初めて全部の小学校から応募があり、529句の中から入選作品13句が選ばれました。

宮川昭男副会長は「ひとつひとつの言葉を大切にすることが必要です。良い作品がたくさんあって感心しました」とあいさつ。作品を一句一句講評しながら表彰状を手渡しました。



入選作品は、土佐西南大規模公園内の『うたの柱』に順に展示されます。

第一席 南郷小2年 坂本一真
さむい朝 頭もすつぱり
みのむしさん

第二席 南郷小4年 畑中一希
秋祭り おけしようにして
はずかしい

第三席 拳ノ川小6年 河村斗也
秋の空 天使の叫び 笑い声

【入選】
からすうり あかいたまで やわらかい
伊田小3年 若藤 秀斗
かりとった 田んぼにかかし のこされて
伊田小4年 宮地 海斗
見上げたら 空一面が 秋の海
拳ノ川小4年 矢野さおり
授業中 まどからひらりと いちよりの葉
伊田小5年 松下 健太
まねをした かかしみたいに 動かずに
伊田小5年 澤田 萌花
空ながめ 雲の形で 秋を知る
佐賀小5年 部府 花梨
すな浜に むらさき色の 花がさく
入野小5年 二宮あゆみ
夏合宿 こわい話で 盛り上がる
伊与喜小6年 多田 真穂
いねかりが 終わった後の 静かな田
三浦小6年 野村 早希
タンポポの わたげが落ちた アスファルト
上川口小6年 田城 公人

「漁師が釣って、漁師が焼いた」のカツオの薫焼きタタキや、自然そのものを美術館に見立て



高知から全国へまなびと元気を
生涯学習を通じて地域活性化と人の交流を進め、生涯学習の推進に取り組む「全国生涯学習フォーラム（まなびピア高知2010）」が11月20日から22日まで、高知市を中心に県内各地で開催されました。
大会2日目の21日には「環境フォーラム」がふるさと総合センターで行われ、満員の会場では、環境保全に取り組む団体や企業の代表者が、その活動を発表しました。



地域や学校を巻き込んだの砂浜清掃に取り組んだ大方高校のグループ、「海辺のアート！ECOベンチャーズ」が高校生の部若者ECO応援隊大賞を受賞しました。

る「砂浜美術館」を手がけたデザインー梅原真さんは、「日本のよき風景の原形は一次産業にある」とし、「環境づくりは一次産業を残していく仕組みとリンクしている」と訴えました。
また、パネルディスカッションでは「地域の子どもたちが地域の自然の価値をどれだけ知っているのか」「何も無いこと、マイナスこそ個性」などの意見が出され、高知県の多彩な自然を生かし、自然体験活動や環境学習の推進を図る「高知自然学校構想」の理念を確認しました。



華麗な技と砂浜清掃
人気のサーフスポット、入野海岸で11月21日、「第1回入野ビーチサーフィンチャンピオンシップ」が開かれ、町内外から集まった91人のサーファーが華麗な技を披露しました。
「県内サーファーの親睦を深め、ビーチクリーンの推進を」と、竹添豊和さんをはじめとする地元サーファーらの集まり「入野ローカル」が企画。プロ経験者も参加する本格的な大会が初めて実現しました。



当日は1〜1.5mの波が打ち寄せる絶好のコンディション。年齢やレベルなどにより6クラスに分かれ、持ち時間12分の間にどれだけ高度な技を成功させるかを競います。
四万十市から参加の男性は「今日はどんな技をやるうか」と戦況を見つめながら武者ぶるい。「おお、今のは良かった！」。人気選手のスピード感溢れるスピンやターンに、見物客からは歓声が上がっていました。
午後からは雨も降りましたが大会は無事成功。参加者らで砂浜清掃をするなど、ビーチを大切にしている心は人一倍です。
竹添さんは「思ったより人が集まってくれた。来年からも続けたい」と話してくれました。